新聞記事から見る浜出祭の由来伝承－明治から現在までの変化

小田川　志穂

1．はじめに

浜出祭は、昭和 51(1976) 年 11 月 24 日に山口県無形民俗文化財に指定された、下関市豊北町を代表する祭である。浜出祭は浜殿祭 (ハマドノ) や浜出祭 (ハマイデ) とも呼ばれるが、本稿では新聞の引用以外は山口県無形民俗文化財指定時の名称である「浜出祭」で統一する。浜出祭の詳しい内容は吉留 (2010) や下関市立豊北歴史民俗資料館・土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム (2011) に記載されており、これらを基に祭の概要を簡単に記述する。

浜出祭は 7 年に一度行われる周期祭で、山間に位置する旧豊北町田耕地区の厳島神社 (現在は田耕神社に合祀) と、海浜部に位置する旧豊北町神玉地区の蛭子社 (現在は神功皇后神社、通称二ノ宮に合祀) の氏子を中心とする 4 つの祭祀集団[1] によって行われる町内広域にわたる祭である。現在の祭は、かつての田耕村小野にあった厳島神社の祭神である女神・市杵島姫神 (イチキシマヒメ) と、神玉村土井ヶ浜にあった蛭子 (夷、戎) 社の祭神である男神・事代主神 (コトシロヌシ) が出合う祭とされ、田耕神社から土井ヶ浜に設けられた祭場まで約 18km を古式ゆかしい装束をまとった約 300 名の人々の行列が練り歩く神幸行列と、それらを祭場に迎えて行われる座の行事によって構成される。

行列は田耕側行列・神玉側行列・山田佐平治組行列の 3 つがあり、田耕地区と神玉地区のおよそ中間地にあたる滝部堀切という場所で 3 つの行列が集合し、そこで男女二神の出合の儀礼が行われる。堀切から山田佐平治組を先頭に 3 つの行列が一つになって土井ヶ浜の祭場まで神幸する。土井ヶ浜の祭場には神功皇后神社の氏子域の人々が 3 つの座を作って行列を出迎え、座で行われる行事をもてなす。現在この 3 つの座は神官座 (江尻座)・波原座 (左座)・岡林座 (右座) と呼ばれ、行列が土井ヶ浜の祭場に到着すると座の行事が始まる。まず神官座のみで儀礼が行われ、その後三座での儀礼で神酒三献や鰤切などが行われる。

参加人数の多い大規模な祭であるが、浜出祭に関する文献や先行研究は少ない。これまで浜出祭の先行調査研究としては、豊北町が昭和 44(1970) 年度に刊行した『浜出祭の記録　山口県選択 (記録等の措置を講ずる無形の民俗資料)』において、浜出祭の概要、及び浜出祭に関する伝承や祭の沿革、江戸時代の文献資料集、民俗的意義等をまとめられている (豊北町史編纂室 1970)。それを引き継ぎ、新たに判明した事実や民話と伝説を加え昭和 51(1976) 年度の浜出祭の概要を豊北町教育委員会がまとめている (豊北町教育委員会 1983)。また平成 16(2004) 年度の浜出祭の実施記録を下関市豊北歴史民俗資料館と土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムが報告している (下関市豊北歴史民俗資料館・土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 2011)。これら以外には、郷土史家や浜出祭に関わる神職が地域誌に掲載したものや、豊北民話編集委員会が豊北地域の伝説や昔話を集めた民話集に、浜出祭が特集

1) 二社の氏子集団に加え、神玉地区根崎にある住吉神社 (通称一ノ宮) の氏子が現在は旧沢組・旧下田組と山田佐平治組をそれぞれ構成し神幸行列に参加する。神玉行列が堀切に向かう途中に住吉神社があり、旧沢組・旧下田組は住吉神社から神玉行列に加わる。

されている程度である (豊北民話集編集委員会 2004)。

この浜出祭の起源について先に挙げた報告書及び文献では中世・蒙古襲来に端を発すると伝わっているとされるが、現在も開始時期は明確になっていない。現在確認できる最古の浜出祭が行われたという記録は元禄 16(1703) 年[2] で、浜出祭の由来については吉留 (2010) はほとんどが江戸時代後期以降の地誌類等に見いだすことができるのみとしている。現代の由来伝承に関する記録は、豊北町史編纂室 (1970) や豊北町教育委員会 (1983)、豊北民話集編集委員会 (2004) にみられ、その起源や由来については諸説あるが大きく次の二つに分かれる。

一つは指定文化財になる際の意見書[3] に書かれている山側の女神と海側の男神との陰陽和合の出合祭という説である。この意見書には次のように書かれている。

「(略) 祭としての要は山地側の小野鎮座の厳島神社 (現在田耕神社に合祀せられている。) と、浜出側の土居ヶ浜鎮座の蛭子社との陰陽和合の出合祭であって、当時としては田耕と神玉は豊浦支藩領と本藩領に分離しており、領地十八 km の間を数村合同のおおがかりな武者行列の警固を伴う渡御式であった。(中略) それぞれの産地を異にした山地と浜の陰陽和合に式年の祭禮行事によって、その都度祭政の一致によって村内の繁栄と秩序を乞い願わんとしたものと思われる。(略)」。

もう一つは、地域に残る口頭伝承の鎌倉時代の蒙古襲来を起源とする説である。田耕側では蒙古兵が侵攻してきたので戦い斃(たお)したとか、神玉側では蒙古襲来時に鎌倉武士が戦って破れたのを祀ったなど様々に語られている。実際に豊北町内には蒙古襲来説にまつわる伝承や地名が複数残っており、「鬼の松」、「鎌倉の森」、「碇石」等の伝承や「五千原」、「三千原」等の地名が伝わっている。なお、三座の行事が行われる祭場が設置されるのは弥生人骨が発見された国指定史跡・土井ヶ浜遺跡の隣接地である。この遺跡からは多くの弥生人骨が出土しているが、現状では蒙古兵の人骨は発見されておらず、豊北町内の人骨が出土した埋葬遺跡でも蒙古兵を示唆するような人骨は見当たらない (土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 2014)。

浜出祭は、江戸時代以降に執行記録が確認されている陰陽和合の出合祭とする公的意見が出されている。しかし平成 16（2004）年度の浜出祭祭場では蒙古襲来に関するアナウンスがされ蒙古の霊 (怨霊) の鎮魂祭ということや五穀豊穣・豊漁の祈願祭と伝えられたとあり (下関市立豊北歴史民俗資料館・土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム 2011)、祭を行なう側には鎌倉時代に始まる蒙古襲来説が残っているようである。このように現在に伝わる由来伝承は様々あるため、浜出祭がいつどのようにして始まりどのように伝わってきたのか、時代とともに由来伝承がどのように伝わり形成されたのかを明らかにしたい。吉留 (2010) では確実に浜出祭の由来伝承について遡ることができる近世後半・近代対象としており、本稿では明治期以降の新聞記事を用いて近代以降浜出祭の由来伝承がどのように変化するのかについて検討する。

新聞記事を用いる理由として、例えば吉留 (2016) では明治・大正期における下関市数方庭祭の変遷を分析する手段に新聞が用いられている。新聞は聞書調査だけで明らかにできない部分や変化する

2) 豊北町教育委員会 (1983) のあとがき (伊藤忠芳 l.10-11)

3) 昭和 51(1976) 年 11 月 24 日に山口県指定無形民俗文化財に指定される際、民俗学者で当時山口県文化財審議員でもあった牛尾三千夫氏によって書かれたもの。豊北町教育委員会 (1983) に掲載された指定書の内容を引用。

社会において祭礼の変遷を見る有効な研究資料であるとして考えられるので、本稿でも近代以降における浜出祭の由来伝承の変遷を明治から平成までの新聞を用いて分析していく。

２．調査資料と分析方法

本研究では、近代以降で購読者数が多く豊北地域の情報を掲載している山口県の地方紙である『防長新聞』、『馬関毎日新聞』、『関門日日新聞』、『山口新聞』の計 4 紙を調査対象資料とする。いずれも豊北地域の情報を取り扱い、前 3 紙は明治･大正期に継続して新聞を発行しており発行部数が多い。下関において発行された新聞で年間発行部数の多いのは『関門日日新聞』(明治 44 年 3,762,000 部発行､県内 1 位) と『馬関毎日新聞』(明治 44 年 2,535,120 部発行､県内 2 位)､山口で発行された『防長新聞』(大正元年 1,305,600 部発行、県内 3 位) であり (吉留 2016)、『山口新聞』の創刊は太平洋戦争後であるが他 3 紙が統廃合を経て『山口新聞』に受け継がれていくため加えている。

記事の抽出方法は、山口県立山口図書館が所蔵している 4 紙の中から浜出祭実施年度の実行月およびその前後一ヶ月ずつの新聞に掲載されていた浜出祭に関する記事を拾い出した。なお、同図書館が所蔵している新聞のうち浜出祭開催年度で最も古いものは明治 32(1899) 年で、それ以降の記事を平成 9(1997) 年まで集めた。集めた記事から由来伝承について書かれている記事のみを抽出し次節で見ていく。分析するにあたり時代を明治期・大正期・昭和戦前期・昭和戦後期・平成期の 5 つに区分している。昭和期は年数が長いため太平洋戦争終戦 (昭和 20(1945) 年) 前後で 2 つの時期に分けている。

また各記事で特に注目すべき伝承部分に下線を、蒙古襲来に関する伝承名や伝承にまつわる地名には二重下線を引いている。なお、記事の文字で解読不能なものは■で表記し、[ ] 内は筆者が推定・記載した文字である。引用文中に出てくるその他の記号 (▼、◇、…、(や＜で終わり括弧がないもの、空欄など) は、原文通りに記したものである。旧漢字はできるだけ原文に忠実に記載したが、一部変換できないものは常用漢字を用いた。旧かな文字で変換できないものは平仮名を用いている。引用した記事も含め、集めた記事一覧は表にして巻末に掲載している。

３．新聞の中に見る浜出祭の由来伝承

明治期から平成期まで新聞記事ごとに書かれている由来伝承内容を見ていく。採りあげた新聞は、新聞名、発行年月日、見出し、由来伝承に関する文面を抜粋して記載し、以下文中では各新聞名を、『防長』、『馬関』、『関門』、『山口』と略す。なお紙幅の都合上、今回は収集記事の全文は掲載していない。

３－１．明治期に見られる由来伝承

事例①　「土井ヶ濱に於ける濱殿祭」『防長』明治 32(1899) 年 4 月 27 日

豊浦郡神玉村大字神田上村字江尻■ [る] 土井ヶ濱にては慣例により去る廿二日盛大なる濱殿祭を執行せ [り] ソモ此の濱殿祭の由來を鳫ぬるに遠く<u>元弘安時代蒙古襲來の際に於ける皇軍勝利の報告祭</u>にして<u>爾來幾多の星霜を経過</u>する<u>今に至るまで依然其の古例を踏襲し來り満七ヵ年毎には</u>同郡田耕村に鎮座せらるる<u>嚴島神社神靈の御神幸あること</u>なるが其の神幸の行列は別項拝觀記にも

あるが如く今尚ほ古代より慣行し來れる格式典禮に基きいとも壯嚴　頗る盛装優美を極め同郡西北部中最も署名の一大祭なる (略)

事例①では浜出祭の起源は鎌倉時代の蒙古襲来時で勝利した報告祭と書かれており、これまでずっと続いており 7 年毎に田耕・厳島神社の神幸が行われると書かれている。蒙古襲来に関する伝説や地名については書かれておらず、同日の新聞記事である事例②に詳細が載っているとある。

事例②　「濱殿祭拜觀の記（一）」東古　吉村清亨『防長』明治 32(1899) 年 4 月 27 日

(略) 武夫のたけき心を盡しての後にこそふけ伊勢の神風當時元寇十萬大擧して吾西邊を犯す實に國家の大變にして上下震懾したりし事は如何計りむりしが思ひて茲に至れば吾人は毛髪の悚然たるを覚■盖し北條時宗が忠勇義烈の精神は凛として鐵よりも堅く國民が [鬱] 勃たる敵愾心は確固不拔にして能く大事に處して [愆 “あやま” とルビ] らず上下一致遂に此大敵 [戰] 滅し彼等が肝膽をして寒からしむ嗚呼何物の壯快か之に過ぎん千載の下濡夫も之が爲に起ち怯人も之が爲に奮ふ國民たるもの誰か此壯擧を忘れんとするも得んや時は維陰暦三月十三日晩咲の櫻花は煇熳として天眞の美を爭ふの候元寇撃退の好記念として吾豊浦郡の活歴史として萬世に保持すべき濱殿祭に詣で見聞する處状を記し以て縣下憂國の志士に頒たんと欲するに先だち聊か斯祭の起源を摘記 [す] ることゝせん抑も濱殿祭は（土俗之を濱出と言ふ其故は田耕村鎮座嚴島大明神土井が濱に神幸し玉ふに依る）蒙古襲來の當時探題北條武蔵守土井ヶ濱に要塞を築きて戒嚴 [す] るや壹岐對馬の敗報は切りに至り敵兵は鷹の島に據り將に築紫に迫らんと [す] るの急を聞くや執事小笠原次郎入道井上左京亮をし [て] 嚴島神社に詣で加藤治部大輔社 [僧] 大専坊と共に敵國降伏の禱 [壽] を爲さしむ此時龜山上皇は万乗の至尊をも顧み玉はず身を以て大廟に [“ごう” とルビ] 願し玉ひ擧國至る所の神社佛閣祈禱の聲を聞かざるは [な] し偶■弘安四年七月晦日颶風忽ち起り敵艦爲に碎くるに乗じ吾兵撃て之を袖海に懺殺するの一大克捷を奏す然るに我豊浦郡西海岸一帶の地は死体兵器船其の漂流するもの頗る多し就中神田村の海濱には敵兵生 [な] がら漂着し■起能く戰ふものあり我兵撃て之を殺し首を埋め松を植ゑて標と [な] しそれを**鬼の松**と言ふ今尚■現在せり（鬼の松は太さ丈餘にして蟠掘の状臥龍の如し傍らに之と並立して殆んど同様の松あり見違ふべからず土人の語る處に據れば明治廿七年日清宣戰の御詔勅を發し玉ふ前自ら燒け初め火の消えゑざることを三日に及び更に火の出る所を知る由 [な] し里人之を奇襲とし神火と云ふされば今は燒死して面目を失せるは惜むべし）又た我兵にして死するものあり之を埋む鎌倉の社と云ふ■（社は海濱にして蛭子社を去る西北方三丁の所にあり社の中央に小祠を安置す）敵兵にして能く走るものもあり疾走して田耕村に入る白矢空中より飛び來り射て之を殺し首を部上の里に埋む之を蒙古の首塚といふ今尚存せり（部上は田耕村の小字にして即ち嚴島神社鎮座地 [な] り）事體此の如し時人神德を畏み克提を謳歌し嚴島明神を奉じて土井が濱に於て凱旋の式を擧げ奉賽の誠を [致][す] 是れ濱殿祭の起源 [な] り爾後毎年此典を行ひ以て恒例とせしも何時の頃 [な] りけん七年に壹回擧行することゝは [な] れり而して往古は毎年陰暦十一月中旬 [な] りしを故ありて慶應年間より改めて陰暦三月に擧行することゝせしより本年は恰も五回目の祭典に當れり (略)

事例②は事例①と同日の新聞で、神職[4]が浜出祭の由来について書いたもので事例①の内容がより詳しく書かれている。事例②を見ると、浜出祭の起源は鎌倉時代の蒙古襲来時と書かれている。まず元寇襲来時に鎌倉幕府の命により厳島神社で敵国降伏の祈祷がなされ、その後起こった嵐に乗じて蒙古軍は斃されたが一部の蒙古兵が生き残ったまま土井ヶ浜に流れ着いた。上陸した兵は厳島神社のある田耕部上まで到来するがここで斃された。この日本側の勝利を祝い厳島明神を土井ヶ浜に奉じて報賽の誠を表したのが祭の始まりとされている。祭が始まって以降毎年土井ヶ濱への神幸が行われていたが、いつの頃からか 7 年に 1 度となったとある。

地名の記載はなく、鬼の松、鎌倉の杜[5]、蒙古の首塚と 3 つの伝承が書かれている。鬼の松については「明治 27 年日清宣戦のご詔勅を発せられる前、自ら焼けはじめ」たと明治 28(1895) 年に終戦した日清戦争に関連づけた文が記載されているが、この伝承はこの記事にのみ見られる記述である。

3－2．大正期に見られる由来伝承

事例③　「田耕辨天の濱殿祭 (上)」『関門』大正 9(1920) 年 4 月 2 日

豊浦田耕村に鎮座の嚴島辨天の濱殿祭と云ふのは弘安六年以来七百有餘年になる今日まで滿七ヶ年毎に荘嚴な祭典が行はれ居る (略) この行列は鎌倉時代の風俗で頗る森嚴荘重を極め稀に見る古典式のお祭りである■祭典の由來と行列の模様を略記することとしやう (中略) 土井ヶ濱は約四五丁の森をなしてゐる森の東に當つて鬼の松といふのが [蟠] 龍のやうに繁つて一段高く見へるその西に高さ八尺周圍四尺位ある▼碇石といふのがあつてその側に小やかな祠殿が建てられてゐる之を一般の者は濱の夷と呼び信仰者が頗る多いさうであるこの邊り一帯は日本海の荒波のため侵蝕され奇岩怪石並に立ち妙景が少なくない此處から田耕村に三里あるこの古代的祭典の由來を聞くに彼の弘安四年蒙古の軍勢が海を壓して筑紫灘に攻寄せた時恰も神風が起つて大部分は海底の藻屑と消えたがその一部船が辛くも土井ヶ濱に▼漂着して纜を繋いだのが例の碇石と言ひ傳へられて居る時の探題北條武蔵守師時は家來の重信と共に軍勢を牽ひ敵の首級を討取り附近の濱邊に女松を植た之を後世稱して鬼の松と呼んで來た傳説によると元の兵が陸地深く逃込めるを追 [“か” とルビ] け三千人を討殺せし所を瀧部村三千原と云ひ [其] 残り五千人を鏖にした處を五千原といふ土井ヶ濱 [の] 東 [數] 町の處に▼鎌倉森といふのがある茲に天然石の苔蒸た大きい墓があるこれは重信が手傷を負ふて殪れたと傳へられて居るこの邊には貝殻が澤山土に混つて■たのを見ると當時は一面海であつた [こ] とが想像される國防守護として鶴ヶ岡八幡宮を西國へ二ヶ所勸請を申し [た] 時岸瀬と神の嶋である元の軍記五種は同村二宮神社の▼寶物としてあるこの騒 [動] があつて數年經つと附近一帯は夜に入ると怪聲起ると共に不思議な鱗光が此處彼處に明滅し旋風砂塵を捲くことが度々あるので界隈のものは痛く恐怖して夜に入ると通行するものはない里人は之を夷の崇りだといつて附近の竹木土砂に對し手足を觸れることを忌てゐた二宮神社三田氏は深く

4) 吉村清亨「故中山忠光卿御薨去事實調書」(中山神社所蔵) に自身の紹介として、赤間宮から長門國一宮・住吉神社の禰宜に補されたとの記述がある。

5) 鎌倉の杜は現在 “森” が使われている。

之を憂ひ三七二十一日が間手に油を入れ火を燈し▼斷食無言で八百萬の神々に祈禱すると俄に天地晦冥咫尺を辨ぜざるまでに暗黒となり嚠喨たる音樂の中に女神現はれ [宣] はく之は蒙古軍の魂が宇宙に迷い居れるを以て之を祭つて鎮めよとの御告があつたが姿は何時しか消へて夢の如く感じた三田氏は直に宮を建てゝ蒙古軍の姿を木象に刻て祭神としたのであるさうな

事例③では、起源は蒙古襲来後と読み取れるがはっきりとは書かれていない。由来として蒙古襲来の数年後に土井ヶ浜で蒙古兵による祟りが起こり、その鎮魂のため宮を建て祀られたとある。

記事前半には蒙古襲来時の様子が書かれている。まず弘安 4 年に蒙古軍が筑紫灘に押し寄せた際、神風が起こり大部分は海に沈んだが僅かに生き残った船が土井ヶ浜に漂着した。そこで鎌倉幕府の北條氏は家臣を引き連れ土井ヶ浜で応戦し敵の首領級を打ちとったが、蒙古兵は滝部・田耕方面へ進みこれに応戦したとあり、田耕で全滅したとは書かれていない。

記事後半には蒙古兵の祟りを鎮魂したことが書かれている。蒙古襲来の数年後、土井ヶ浜一帯は夜になると怪聲や不思議な光が明滅したり旋風砂塵が度々起こったため、人々は夷の祟りだと言い畏れた。そこで二宮神社が祈祷するとこの怪奇現象は蒙古兵の魂がさまよっているせいなので祭って鎮めよとのお告げを受けたため、すぐに宮を建てて蒙古軍の木像を彫って祭神として祀ったとある。

伝承は碇石・鬼の松・鎌倉森の 3 つ、地名は三千原・五千原の 2 つ記載されており、記事の中で最も多い。いずれも敵兵を斃した場所や敵兵や日本側の武士を埋めた場所と書かれており、戦地であったことが明確に示されている。

事例③には明治期に見られた敵国降伏の祈祷やその祈願成就の報告祭、土井ヶ浜への神幸などは出てこず、古戦場であったことや夷の祟りとその鎮魂などは江戸時代後半に書かれた『防長風土注進案』[6] と類似している。

3－3．昭和戦前期に見られる由来伝承

事例④　「田耕村の嚴島神社の殿祭」『関門』昭和 2(1927) 年 4 月 11 日

(略) 嚴島神社の縁起及び浜殿祭の由来は

＜嚴島神社 田耕村大字部上にあって祭神は市杵島比賣命を祀る合社古書類■■の為傳■詳らかでないが弘安四年鎌倉より加藤治郎大輔が來りて敵■降伏の祈願をした事は今尚記録にあるのでそれ以前に祀られありし事は事實である只今の社殿拝殿は文化四年七月楼門は安政二年の建立である

浜殿祭（嚴島神社社家西島氏所蔵の書　本大祭の起因たる弘　四年胡元來寇■襲の [報賽に初め元] ■■使者を遣し鎌倉の執権北條時宗■て [臆] せず [敵] 兵を挙げて [我] 對馬を犯す鎮西 [の] 諸将射て之を走らす■■■■■■■ [九] ■ [を渡す我] 長門室津に■る之を鎌倉に■■■す時宗之を斬る又使者大寧府は■■之を斬る是に於いて元十大に怒り大軍入寇す本州は鎮西對時の■地なるを以て■探題北條武蔵守命を承けて戒嚴す■本郡神田村で井ヶ浜を以て要塞とし執事小笠原二

6)「先大津宰判　神田上村　十一」各宰判の代官を通じて官下・各市町村島浦へ実態調査が命じられ、地方では主に庄屋が注進しまとめられたもの。先大津宰判は天保 13(1842) 年着手し弘化 4(1847) 年に完成したと言われている。

郎入道をして■ (我) 嚴島神社社司加藤治部大輔社僧大専坊に命じて外敵降伏の祈願を修せしむ■■■ [気] なるに及び本郡指揮の將として井上左 [京] 亮兵を率ひて鎌倉より來り親しく本社に詣で祈る處あり■年七月■兵肥前の關■に依る激戦■回同七月大風雨の為敵大敗す敗兵の大井ヶ濱に漂着する事の幾百なるを知らず虜将身長七尺容貌鬼の如きもの [闇] を■つて元田耕村に來たり、本社の前に於て白羽の矢飛び來たりて遂に斃れる衆以て神意となす同地を鬼ヶ原と云ひ、土井ヶ濱にも埋葬の地を名けて、鬼の松鎌倉杜等あり村民祠を立て戎社といふ濱において■■し本神社 [報] 賽す弘安六年神輿を大井ヶ濱に行幸し、捷奏の装に■す古へは地頭領主が祭費を支給し免除地等を賜り居りしも後この大典中絶せし■さへありしが■ [疫癘] 流行す村民畏れてこれを復興す爾來恒例として今日に及べり此祭典開始以來七百餘年に及ぶ

事例④で起源は鎌倉幕府からの命を受け厳島神社社司に外敵降伏の祈願をさせ、弘安 6 年勝利を祝い神輿を土井ヶ浜に報賽したことによるとある。またこの記事には祭は中絶していた時期があったが、疫病流行し村民は畏れて祭を復興し以来恒例となったことが書かれており、『山口県風土誌』[7] と類似している。

伝承は鬼ケ原、鬼の松、鎌倉社の 3 つが採りあげられ、いずれも死者を埋葬したところと記載されている。地名の記載はない。

事例⑤　「田耕の濱殿祭」『馬関』昭和 2(1927) 年 4 月 18 日

(略) 此古式の神事の由來は弘安四年夏元寇襲來際誓旨を奉じ時の執権北條武蔵守が鎮西の各神社へ元寇伏滅の祈願をこめた時嚴島神社（市杵島比賣命を祭神とす）の社主加藤治郎大輔僧専大坊専心に祈願を■たゝめに同年七月突如として大風起り元軍は全滅した。

執権は神恩貴しとして同六年（紀元一九四三年）神輿を奉じ元寇襲來の戦場たる土井ヶ濱に幸し報 [賽] の誠意を表したが始まりである (略)

事例⑤で起源は弘安 4 年の元寇襲来の際、厳島神社の社主は祈願し 7 月大風起こって、蒙古軍は全滅したので執権が元寇襲来の戦場である土井ヶ浜に神輿を奉じ報賽の意を表したのが始まりとされている。明治期同様の由来が書かれているが、伝承・地名の記載はない。

事例⑥　「弘安の役の鎮魂・濱殿祭」『関門』昭和 9(1934) 年 4 月 9 日

かねて蒙古の軍器の発掘にて世にその名を知られたる長門國豊浦郡神玉村の土井ヶ濱にては過ぐる弘安役の鎮魂祭（濱殿祭）が八ヶ年毎に行はれる (略)

行列は半里に達し山なす群集の中を発砲しつゝ威儀堂々と土井ヶ濱の祭場に到る (略)

昭和戦前期の中で事例⑥だけ浜出祭は鎮魂祭であるとされ、田耕に関する記載がなく土井ヶ浜で

7) 近藤清石、巻第二百、長門国之二之二十六、豊浦郡　村誌之二十五 (1904)。『防長地下上申』や『防長風土注進案』を基に、近藤の解釈をまじえて編纂した書物。

8 年ごとに行われると書かれている。8 年ごとに行われるという記述は、江戸時代の地誌類等では神玉側のみに見られ、田耕側では 7 年となっている[8]。神玉側の 8 年というのは数え年と推測されるが、事例⑥は『防長寺社由来』[9]『防長地下上申』[10]『防長風土注進案』[11] の蛭子社を参照した可能性が高いと考えられる。伝承・地名の記載はない。

事例⑦　「戰勝記念大祭」『関門』昭和 9(1934) 年 4 月 14 日

（略）この祭典の由來調べて見ると遠く弘安の役に始まってゐる。

鎌倉の執権北條時宗が元の使を斬るに及んで、雲霞の如き元軍海を壓して筑前博多に襲來した。勢ひ長門沿岸防備必要あり、探題北條武蔵守命をうけ土井ヶ濱を要塞として警備おさおさ怠りなく、元軍來れと待ちかまへる折柄博多灣頭に於ける激戦の情報櫛の齒を引くが如く、急報又急報――。こゝに於て武蔵守一層防備を固める一方執事小笠原二郎入道をして田耕の嚴島神社々司加藤治郎大輔に命じ「外敵降伏」の祈願を行はしめた斯くするうち本土指揮の將として井上左京亮兵を率ゐて鎌倉より馳せ下り、先づ嚴島神社に詣でゝ戦勝を祈る。かゝる折柄弘安四年七月亀山上皇叡慮を煩はし給ひ伊勢大神宮に「身を以て國難に代らん」と畏くも祈らせ給ひしにや神慮忽ち起ってさしもの敵艦木の葉の如く敵の軍勢海に溺れ死すもの數知れず、我軍これに乗じて大いに奮戦して敵を破る敗兵の土井ヶ濱に漂着する者又幾千幾百を知らず、こゝに上陸せる

敵兵は我第一陣を突破して田耕の部上（へねえ）に押寄せて來た。武蔵守采配振って指揮し我軍大いに奮戦突撃を加へ敵將卒は殆ど殲滅するに至った。これよりその地を鬼ヶ原と稱し敵將の首を嚴島神社付近に埋め今尚「蒙古の首塚」として残ってゐるといふ茲にこの大勝を嚴島神社に奏し弘安六年報賽の大典を挙げ神輿を土井ヶ濱に奉じ全部鹵簿奏捷の装に擬したものであるといふ。爾後地頭領にその祭費を支給し特に免除地を恩賜し、田耕、神玉両村が祭祀を擔任して七年毎に大祭を執り行ふことを慣例と定められたもので實に弘安の昔我等の祖先が非常時困難に處しよく奮戦激闘して皇國を安泰ならしめたる意義深き戦勝記念大祭として數百年に亘り繰返されて來たものである。（略）

事例⑦で起源は蒙古襲来時に厳島神社へ戦勝を祈願し、その後弘安 6 年に厳島神社へ勝利を奏し報賽の大典を挙げ神輿を土井ヶ浜に奉じたとある。明治期の由来に加え上皇が伊勢神宮に祈ると神慮が起こったや我々の祖先が非常時に困難に処し奮戦激闘して皇国を安泰ならしめた意義深い戦勝記念大戦など、巨大なもの・敵・国を倒した事象を神威高揚の姿のイメージ化が行われている。

8)「豊浦郡田耕村寺社由来」『防長寺社由来』元文 3(1738) 年～ 4(1739) 年に田耕村にある厳島明神等 8 社寺について各社人、僧職が記載した由来書で、厳島神社の項には記載者名なし。及び元文 3(1738) 年 12 月社人加藤土佐・織部が庄屋宇兵衛宛に提出したもの。

9)「神田上村一二両社外末社」元文 3(1738) 年 12 月に神田上村神主、石井出羽・数馬が記載したもの。及び「一宮八幡宮外諸社　西慶寺　法船寺　光沢寺」寛保元 (1741) 年酉ノ 10 月 11 日　豊浦郡神田村三社神主、石井出羽が記載し萩藩・絵図方頭人の井上武兵衛に提出したもの。

10)「豊浦郡中神田村由緒書」元文 3(1738) 年豊浦郡中神田村庄屋宗像久左衛門によって書かれ、萩藩・絵図方頭人の井上武兵衛に提出したもの。

11)「先大津宰判　神田上村　十一」。

伝承は田耕に関するのみの鬼ケ原、蒙古の首塚の２つでどちらも敵を斃した場所として記載されている。地名の記載はない。

事例⑧　「田耕村嚴島神社濱殿祭」『関門』昭和 16(1941) 年 4 月 8 日

（略）この祭典の紀元は弘安四年元來寇の時我兵の奉捷に　始し初め元主兵を起して大挙入寇するや長門國は鎮西對峙の要地たるを以て探題北條武蔵守命を承て戒嚴、本邦神玉村大井ヶ濱を以て要塞となし執事小笠原二郎入道をして、嚴島神社々司加藤治郎大輔社僧大尋坊等に命じて外冦降伏の起請を修せしめたが、警報の危急なるにおよび本國指揮の將として井上左京亮兵を率ひ鎌倉より來り■しく同社に詣でて祈る所あり是年七月敵兵既に肥前 [鷹] 島に■る是より戦争數回同月大風雨敵船破壊我軍之に乗じて突撃大ひに之を破る敵の敗兵土井ヶ濱に漂着するもの數百千なるを知らず我兵逆に■ひ虜の一將身長七尺有餘相貌鬼の如く孤軍奮闘す其兵散るに及びて囲を破り東に走り田耕村に來る勢ひ奔馬の如し時に忽ち白羽の箭飛來し之を斃せり衆喜び以て神矢となす敵餘兵大に狼狽す■し之を斃すこゝに於て■を同社に奏し其虜將の頸を収めて本村部上の里に之を埋むこれより此地を鬼ヶ塚と云ひ塚を蒙古の首塚と稱ふ今尚有也り因に土井ヶ濱にも塚あり松を植えて標となす鬼の松といふ此の時我が兵もまた死傷ありてこれを埋葬せし所を稱して鎌倉社といふ村民祠を建てゝ今にこれをまつれり同六年同社においてはじめて報祭の典を挙げ神輿を土井ヶ濱に幸し奏捷の■に■せり爾後地頭領主共祭■■ら田耕神田の両村において担当し毎七周年にこれを続くるを慣例とす其後田耕外兩三村疫病流行す村民大にこれを憂ひて占に問ひしに濱殿の祭典を怠る事ありてこの疫病を致す所なりと因で■に例祭を挙ぐ疫病■に止む是より衆間敬意尤も重きを加へたり■るに大政一新後祭費支給免除地等の恩賜費停止させられたるも信者相計りて祭祀を怠らず

現今に傳へたものである（略）

事例⑧で祭典の起源は弘安 4 年蒙古襲来時に厳島神社社司に外寇降伏の起請させ、弘安 6 年に厳島神社がはじめて報賽の典を挙げ神輿を土井ヶ浜に幸したとあり、明治期の記事と同様の由来が見られる。さらに田耕他 3 村に疫病が流行し、占うと浜殿の祭典を怠ったことが原因だと出たので再び祭を挙げると疫病は治まったと書かれている。これらの由来伝承は『山口県風土誌』を参照していると思われる事例④を基に書かれたと考えられる。また疫病流行の原因は浜出祭を怠ったせいであり、祭を復活したことで疫病が治まったことによって、以後祭は大切に行われるようになったとある。祭を止めると疫病が流行るという意識を生み、明治維新後祭費が支給されなくなっても祭を継続する理由と読み取ることができる。

伝承で事例⑧は鬼ケ塚、蒙古の首塚、鬼の松、鎌倉社の 4 つが登場する。いずれも死者を埋葬したところが記載されている。地名の記載はない。

３－４．昭和戦後期に見られる由来伝承

事例⑨　「豊北町の浜いで祭り」『防長』昭和 30(1955) 年 4 月 5 日

その規模の壮大と華麗さは周防、長門にかけての随一であり、しかも中世前期弘安の異賊（蒙古）調伏祈願にまつわる七百年の伝統を誇る大祭事〝浜殿祭”（俗に浜いで祭）(略)

◇祭りの由来…さてこの由来については日本先史彌生民族の生態究明に大きな役割を果した土井ヶ浜彌生人骨の発掘遺跡が斎場の現場であり、田耕部上（へねえ）周辺の古代遺跡と見られる地帯の様相などからみて、上代民族の分布に関連した闘争、信仰、祭祀の根強い伝統の流れが、時代の色あげをされてきたと思われるが、祭事を彩るストーリーは－。

◇第一話…弘安四年（一二八一）七月元軍（蒙古）が筑前博多に来寇した時、時の長門探題武蔵守北条師時が小笠原入道連念（後の守護代）を使いに立てて田耕厳島神社に外敵降伏の祈願をさせた。敗退の元軍枝隊は響灘を漂流死物狂いで土井ヶ浜に上陸、滝部三千原に追いつめられ、敗走して田耕五千原で敵将は白羽の矢（神の矢）に射抜かれて落命、その死体は田耕鬼ヶ原（蒙古塚と呼ぶ小高い丘陵地がある）に埋め、同六年に戦勝報告の祭事を催して土井ヶ浜蛭子社に御神幸となった。（県風土誌参照）

◇第二話…こうした花々しい長門旧族の武勇伝は、祭りの行事とともに時代のコケを重ねるうちすたれたが、享保十八年（一七三三）山陽、山陰、西海、四国をおそった大凶作と悪疫流行で防長二十万の流民（当時の人口約四十六万）が餓死した時（県天災地異年表）殺された蒙古兵の怨霊を鎮めるために再建したと伝えられる土井ヶ浜蛭子社（風土注進案）に神玉江尻の二宮（神功皇后社）宮司西嶋采女が二十一日の祈願をかけ、満願の日「この地[12] 古戦場にて、別けて蒙古の兵あまたうちほろぼされ、祟りをなさん、さらば七年に一度諸人こぞりて－」と浜殿神事復活のお告げがあった。（浜殿祭略意書から）こうした神がかりに江戸文化の花やかさが輪をかけて、祭りの姿を武家のいかめしさと庶民の派手な風流さが目だって、七浦の大ブリを蒙古兵に見立てて三ツ切りする〝魚切り神事”（古式相伝の法あり）など江戸好みの豊年豊漁にちなむ行事が登場してきた。(略)

事例⑨で祭の起源は元寇襲来時の弘安 4 年厳島神社に外敵降伏祈願をさせ、弘安 6 年に戦勝報告祭として土井ヶ浜の蛭子社へ神幸したと書かれている。その後祭は廃れたが江戸時代に大凶作・疫病流行した際に神功皇后神社の宮司が祈祷すると、凶作・疫病流行の流行原因は土井ヶ浜で斃された蒙古兵の怨霊の祟りだと分かり浜出祭復活のお告げを受けたと書かれている。

この記事は明治期の由来に加え『山口県風土誌』を基にしている昭和戦前期の事例④⑧と類似しているが、江戸期に起こった大凶作・疫病流行の年が享保 18(1733) 年[13] と具体的に記載されている点と大凶作・疫病流行した際に神功皇后神社が祈願したと書かれている点は事例④⑧とは異なっている。

また、浜出祭に江戸好みの豊漁豊作祈願の意味合いが加わったという由来が初めて登場する。伝承は鬼ケ原が敵兵を埋めた場所として記載され、地名は三千原と五千原の 2 つが古戦場として記載される。

12) 土井ヶ浜を指すと筆者推測。

13) 渋谷正勝編 (1953) に享保 18 年以前より虫害起こり穀物類は枯れ牛馬は死亡し疫病が流行、享保 17 年は大凶作、享保 18 年は防長の飢饉で死者多数出たとある。

事例⑩　「豊北町「浜殿祭」に人出六万」『防長』昭和 37(1962) 年 4 月 16 日

(略) この浜殿祭の起源はいまから六百八十一年の昔（弘安四年）蒙古の軍勢が土井ヶ浜に押し寄せた（弘安の役）とき、長門の国の武将は厳島神社に戦勝を祈願して、五千原の戦場で見事外敵を打ち破ったといわれる。この戦勝を祝い、外敵退散の神事として始まり、今日に伝わったものだが、後に一時中断され七年に一度の神事としてはじまったのは徳川幕府時代の享保十八年、いまから二百三十年前である。

この年、同地方に疫病が流行し、その上大凶作が襲った。そこで厳島神社の神主がおうかがいをたてたところ、五千原で戦死した蒙古軍の怨霊がたたっているとのお告げ。さっそく神事を復活したところ、たちどころに疫病はあとをたちしかも大豊作、大漁だったという。したがってこの神事は外敵退散に端を発し、後年は戦死した蒙古兵の霊を慰めることによって、農耕、漁業の豊作に豊漁祈願に推移して今日に伝わったような次第このほか七年に一度の神事については、七夕にちなんだとか種々俗説もある。(略)

事例⑩では祭の起源は弘安 4 年の蒙古襲来時に厳島神社に戦勝祈願をし、勝利したことを祝った外敵退散神事として始まったと書かれている。後に一時中断されたが享保 18 年に復活し、以来 7 年に一度の神事として今日まで続いているとある。さらに享保 18 年に大凶作・疫病流行したので厳島神社の神主が祈祷すると五千原で斃された蒙古軍の怨霊が祟っているとのお告げを受け神事を復活させると疫病は治まり豊漁豊作になったと書かれている。外敵退散に始まり、慰霊のため復活、豊漁豊作祈願に推移しながら今日に続いている。

事例⑨と事例⑩は同じ新聞社で、事例⑩は事例⑨の 7 年後の記事であるが内容が類似しているため事例⑨を参考にされていると考えられる。しかし疫病等が流行した時に祈祷した神社が事例⑨では神功皇后神社だったのが事例⑩では厳島神社へと変わり、さらに疫病流行等の原因となった蒙古兵が斃された場所が事例⑨では土井ヶ浜だったのが事例⑩では田耕・五千原へと変わっている。事例⑨では神玉側のことを書いているのが事例⑩では田耕側へと変わったのは、事例⑩が掲載された昭和 37(1962) 年に土井ヶ浜遺跡が国指定史跡となったことに関係すると推測される。土井ヶ浜では昭和 28(1953) 年より本格的に発掘調査が開始され、その結果科学的検証によって土井ヶ浜は弥生時代の墓域であり土井ヶ浜で発見された多数の骨が弥生時代の人骨であることが判明しこれまで考えられていた蒙古襲来による蒙古人の人骨ではないことが明らかとなり、昭和 37(1962) 年には土井ヶ浜遺跡が国の指定史跡となる。

伝承の記載はなく、地名は五千原が古戦場で敵を斃した場所として記載される。

事例⑪　「豊北町　七年に一度の“濱殿祭”」『防長』昭和 44(1969) 年 4 月 9 日

(略) 浜殿祭は約六百五十年前、蒙古襲来のとき長門の国は土井ヶ浜を中心に防備をかため、蒙古軍を迎え討ち、悪戦苦闘のすえ撃退した。この蒙古襲来ののち、両軍の犠牲者の霊を祭るため、同地の蛭子の森（えびすのもり）に事代主神と市杵島姫神をまつる二つの浜殿が建てられた。

ところが約三百八十年前の天正十六年、火事で二殿とも焼失した。事代主神をまつる浜殿は直ちに同地に建てられたが、市杵島姫神を奉祀する殿堂は、田耕部上に建てられ、二神は別れ別れに祭祀が続けられた。それ以来、この地方に疫病や飢饉（ききん）が相ついで起こり、人民は苦しんだ。

市杵島姫神を祭る田耕部上の当時の神主西島采女が、浜殿に参拝して祈願したところ、二神の分離が原因であると知り、七年ごとに両神を浜殿に迎えて鎮魂の祭りを行うことを決め実行した。

この祭りが始まると、飢饉はなくなり、豊漁豊作が続いた－と伝えられている。(略)

事例⑪では豊漁豊作祈願という由来は残っているが、起源の内容に変化が見られる。その起源はまず蒙古襲来後に蒙古軍・日本軍両軍の犠牲者の霊を祭るため土井ヶ浜に二つの浜殿が建てられ男神と女神がそれぞれ祀られた。しかし江戸時代に火事で二殿とも焼失してしまい、二殿は土井ヶ浜と田耕に離れて再建されたがその後飢饉や疫病が起こった。そこで女神を祀る田耕の浜殿で祈祷すると飢饉や疫病の原因は男女二神の分離であると判明し、7 年毎に男女両神を浜殿に迎えて鎮魂祭を行うようにすると飢饉はなくなり豊漁豊作が続いたのが始まりと書かれている。祭のきっかけは蒙古襲来だが、これまでにはない蒙古襲来後に建てられた二つの浜殿と男女二神の分離による鎮魂祭という由来が登場する。

伝承は蛭子の森が二つの浜殿が建てられた場所として記載され、地名の記載はない。

事例⑫　「雨をつき浜殿祭」『防長』昭和 44(1969) 年 4 月 16 日

浜殿祭は約六百年前、蒙古襲来のとき長門の国は土井ヶ浜を中心に防備をかため、蒙古軍を迎え討ち、悪戦苦闘のすえ撃退した。

このうち両軍の犠牲者の霊を祭るため、同地の蛭の森（えびすのもり）に事代主神と市杵島姫神をまつる二つの浜殿が建てられた。ところが約三百八十年前の天正十六年、火事で二殿とも焼失した。事代主神を同地に、市杵島姫神の神殿を田耕部上に建て二神を別れわかれにした。すると同地方に疫病や飢饉（ききん）が相ついで起こり人民は苦しんだ。

この疫病やききんは二神を別々にしたのが原因－として、二神をいっしょにし、土井ヶ浜で祭祀を行ったところ、豊漁豊作に恵まれた－との古事にのっとり行われているもの (略)

事例⑫の起源は事例⑪と同じで、二つの浜殿と二神の分離による鎮魂祭で豊漁豊作祈願へと推移していったと書かれている。事例⑪と事例⑫は同じ新聞社で、それぞれの記事はこの年の浜出祭開催前後に掲載されており、浜出祭開催後に書かれた事例⑫は開催前に書かれた事例⑪を基にしていると思われる。この二つの記事に大きな違いは見られず、小さな変化として事例⑪では飢饉等の原因を田耕の神主が田耕の浜殿に祈願したと書かれているが、事例⑫には書かれていない程度である。

伝承・地名の記載は事例⑪と同じで、伝承は蛭子の森が二つの浜殿が建てられた場所として記載され地名の記載はない。

事例⑬　「奇祭・浜殿祭」『山口』昭和 51(1976) 年 4 月 11 日

(略) 豊浦郡豊北町浜殿際（はまいでさい）七年に一度行われる祭りで約六百五十年前から伝わる「浜殿際」は、豊北町の事代主神をまつる浜殿と、約二十キロ離れた田耕町の市杵島姫神をまつった田耕神社から、男神女神が繰り出され一つの場所で合体、豊作や豊漁、虫よけを祈願する。

同町の海岸一帯は鎌倉時代蒙古軍が来襲し二度も激闘があった古戦場。そのときの両軍犠牲者の霊を鎮めるために二つの浜殿を建立した。しかし天正六年（一五八八）に大火で焼失したが、事代主神の浜殿は同位置にすぐ再建されたものの、市杵島姫神の方は約二十キロも離された田耕神社に移された。

二神が離されてから、同町では悪病、ききんと続出。ところが二神を一つの場所に迎えて祭りをしたところピタリととまり、以来七年に一度この祭りが催されるようになった。(略)

事例⑬では起源として、事例⑪と事例⑫と同じく二つの浜殿と二神の分離による鎮魂祭が書かれている。その起源はまず蒙古襲来後に蒙古軍・日本軍両軍の犠牲者の霊を祭るために土井ヶ浜に二つの浜殿が建てられたが江戸時代に火事で焼失し、一つは同じ場所に再建されたがもう一方は田耕に移された。二神が離されてから悪病や飢饉が続いたが二神を一つの場所に迎えて祭を行うと悪病や飢饉が治まったので、それ以来 7 年に一度祭を行うようになったとある。事例⑪では書かれていた悪病や飢饉の原因が神社で祈祷することによって分かったことは書かれなくなっている。

またこれまでにも見られた豊漁豊作や虫よけを祈願するという由来に加え、新たに男神女神が繰り出され一つの場所で合体するという男神女神の出合祭という由来が登場する。この事例⑬が書かれた昭和 51 年は浜出祭が山口県指定無形民俗文化財となった年であり、その影響を受け指定時の意見書に書かれた男神女神の出合祭という言葉がこの記事で初めて出る。また祭自体を奇祭であるという捉え方がされている。伝承・地名の記載はない。

事例⑭　「にぎやかに浜出祭」『防長』昭和 51(1976) 年 4 月 12 日

(略) 伝説によると、この祭りは蒙古襲来の時、豊北町付近の人々が田耕地区の厳島神社（現田耕神社）と神玉地区の神功皇后神社で勝利を祈願、そのかいあって神玉地区土井ヶ浜と田耕地区鬼ヶ原で敵兵は全滅した。喜んだ住民は外敵退散の神事として土井ヶ浜に御神幸の典を挙げる＝弘安四年（一二八一）＝ことになった。その後、祭事を怠ることによって凶作・疫病が流行したため、再び蒙古撃退ゆかりの両神社に参拝＝享保九年（一七一六）＝したところ、その後豊作が続いたという。以来二百六十年七年に一度行われてきている。

祭りは、田耕地区の人たちが土井ヶ浜に向かう浜出祭と、土井ヶ浜での神事、浜殿祭に分けられ、(略)

事例⑭で起源は昭和 30 年代の事例⑨と事例⑩のように蒙古襲来時に神社で勝利を祈願し、勝利したことを祝う外敵退散神事として土井ヶ浜に神幸したのが始まりとある。またその後一時神事を怠ったことにより江戸時代に凶作・疫病が流行したので蒙古撃退ゆかりの神社へ参拝すると豊作が続いた

という由来も事例⑨⑩と類似している。

大筋の由来は同じであるが所々変化が見られる。まず蒙古襲来時には 4 点変化が見られ、勝利を祈願したのは神職ではなく地域住民である点と、勝利を祈願した神社が厳島神社か神功皇后神社のどちらか一方ではなく両社に祈願した点、蒙古軍が全滅した場所は土井ヶ浜と田耕の両方と書かれている点、土井ヶ浜へ神幸した年が弘安 4 年となっている点である。次に江戸時代に祭りを復活させた際には 2 点違いが見られ、凶作・疫病が流行したのが享保 9 年とされている[14]点と、祭事を怠ることによって凶作・疫病が流行したために厳島神社と神功皇后神社両社に参拝したと書かれている点である。

その他の変化について共通しているのは、この祭が地域住民の力によって始まり続けられてきたことと、田耕地区と神玉地区両方の祭と主張されていることである。

伝承では鬼ケ原が田耕地区で蒙古兵が斃された場所として 1 つ記載されており、地名の記載はない。

３－５．平成期に見られる由来伝承

事例⑮　「7 年に一度　浜出祭」『山口』平成 2(1990) 年 3 月 25 日

(略) 山側・田耕地区の厳島神社＝現在は田耕神社に合祀（ごうし）＝と浜側・土井ヶ浜の蛭子社との陰陽和合の出合祭で、県の無形民俗文化財にも指定されている。(略)

祭りの執行記録は元文三年（一七三八）のものが最も古く、町教委の伝承記録（昭和五十八年）は、「当時としては大掛かりな武者行列の警固を伴う渡御式だった」としている。

事例⑮では起源は書かれておらず、山側・田耕の厳島神社と浜側・土井ヶ浜の蛭子社との陰陽和合の出合祭であると指定時の意見書の内容のみが書かれ、豊漁や豊作という言葉はなくなる。伝承・地名の記載はない。

事例⑯　「700 年の伝統　厳かに　豊北町浜出祭」『山口』平成 2(1990) 年 4 月 16 日

(略) 祭りは田耕地区の厳島神社＝現在は田耕神社に合祀（ごうし）＝と神玉地区の蛭子社との陰陽和合の出合祭といわれ、大掛かりな武者行列の渡御式として約七百年続いている。(略)

浜出祭は蒙古軍の亡霊のたたりを鎮めるために始められたとの言い伝えがあるが、起原は明らかではない。祭りの執行記録は約二百五十年前の元文三年（一七三八）が最も古く、一節には約七百年続くともいわれている。随所に古式を取り入れているが、行列に鉄砲隊がいたり、山伏が歌舞伎役者のようであったりするなど、時代変遷とともにさまざまな風俗が取り込まれ、町教委の「浜出祭伝承活動記録」（昭和五十八年作成）は「発端が中世にあったとするならば、多くの要素が近世において付加されて、複合的な大祭儀に発展したと結論付けられるだろう」としている。

事例⑯で起源は言い伝えとして蒙古軍の亡霊の祟りを鎮めるため始まったとされているが明らかで

14) 渋谷正勝編 (1953) で享保 9 年に大雨洪水被害と旱魃虫枯風雨被害があったことがわかるが、享保 18 年の方が被害が大きく死亡者数も多い。

はないと記載されている。事例⑮と事例⑯は同じ新聞社で記事はそれぞれこの年の浜出祭開催前後に掲載されており、浜出祭開催後に書かれた事例⑯は開催前に書かれた事例⑮を基にしていると思われる。事例⑯は起源について記述がある以外に事例⑮との違いはない。事例⑯の由来は田耕の厳島神社と神玉の蛭子社との陰陽和合の出合祭であると指定時の意見書の内容が書かれており、豊漁や豊作という言葉は見られない。伝承・地名の記載はない。

事例⑰　「豊北 7 年ぶり「浜出祭」」『山口』平成 9(1997) 年 4 月 7 日

(略) 同祭は、蒙古襲来の際の外敵退散を祈る神事として始まったと伝えられる。一時中断していたが、約三百年前に田耕神社（山の神）と神功皇后神社（海の神）で再開。現在は地域の平和、繁栄を祈る祭りとして七年に一回開かれている。

事例⑰で起源は言い伝えとして蒙古襲来時に外敵退散を祈る神事として始まったと書かれている。由来は一時中断していたが山の神を祀る田耕神社と海の神を祀る神功皇后神社で再開したとあり、指定時の意見書に書かれている山と海の出合祭だけでなく過去の記事で見られた祭の中断・復活が書かれている。また豊漁豊作祈願という言葉は出てこないが、祭は地域の平和と繁栄を祈るものであると変化している。伝承・地名の記載はない。

4．新聞に於ける由来伝承の時代ごとの特徴

前節で見た各記事における由来伝承の時代ごとの特徴を挙げると以下の様になる。まず明治期の由来伝承では浜出祭は田耕・厳島神社の祭であり、元寇襲来時に厳島神社で敵国降伏祈願をし厳島神社へ報賽の誠を表すため土井ヶ浜に凱旋したのが起源とされ元寇勝利の報告祭とされている。祈願をすることにより御願成就の意味合いが見受けられる。

大正期には浜出祭は田耕の祭で元寇襲来が由来だとされるが、明治期に見られた敵国降伏の祈祷・その祈願成就の報告祭という内容は書かれていない。代わりに、蒙古襲来に関する伝承や地名が最も多く登場し、この地が戦地であったことがより明確に示されている。また土井ヶ浜で起こる怪奇現象の原因が夷＝死んだ蒙古兵の祟りであり、その鎮魂が浜出祭の伝承とされている。明治期には見られなかった、土井ヶ浜での夷の祟りとその鎮魂という由来形成に神功皇后神社が関わっていることが確認できる。

昭和戦前期は大正期に見られるような土井ヶ浜側の鎮魂祭の記事は 1 つあるだけで、明治期と同じく蒙古襲来時に外敵退散の勝利報告祭として始まったとされ、江戸時代の資料に書かれている祭は一時中断されていたが疫病が流行したため復活したという由来が出てくる。この背景には、祭を止めると疫病が流行るという意識を生み、祭費を集めることが困難でも祭は継続しなければならないものであるという認識が確認できる。また伊勢神宮や戦勝記念大祭という言葉が出てきており、巨大なもの・敵・国を倒した事象を神威高揚の姿のイメージ化が行われていたと考えられる。登場する伝承はいずれも死者を埋葬したところや敵を斃したところが採りあげられており、死や古戦場を連想させるものばかりである。

なお下関市立豊北歴史民俗資料館・土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム (2011) に、太平洋戦争終戦後の昭和 23(1948) 年の口頭伝承で田耕側のみ巡幸したとあるが、新聞記事を見つけることはできなかった。昭和戦後期に初めて記事が掲載されるのは昭和 30(1955) 年で、村合併により豊北町となって初めて開催された年である。

昭和戦後期の由来伝承は開催年度ごとに次々と変化が見られ、一つ目の大きな変化は昭和 30 年代に豊漁豊作祈願という由来が出てくることである。昭和 30 年代の由来は昭和戦前期に見られた蒙古襲来起源の祭が一時中断されていたが凶作・疫病流行を機に復活し続いているという由来に、江戸時代という明確な復活時期と復活以降豊漁豊作祈願が加わっている。

昭和 40 年代も豊漁豊作祈願という由来は出てくるが、祭の起源が変化する。祭の起源は蒙古襲来後に蒙古軍・日本軍両軍の犠牲者の霊を祭るため同じ場所に二つの浜殿が建てられたが火事により焼失してしまい、二つの浜殿は離されて再建され二神も離されてしまったことによって疫病や飢饉が起こったため、二神を一つの場所で祀り祭祀を行ったことが始まりと変わる。凶作・疫病の際も両神社に住民が参拝と、この祭が地域住民の力によって始まり、続いてきたものであると主張されている。

二つ目の大きな変化が表れるのは浜出祭が山口県指定無形民俗文化財に指定された昭和 51(1976) 年で、この年は昭和 30 年代の起源と由来が書かれた記事及び昭和 40 年代の起源と由来に指定時の意見書の内容が加わった記事が出てくる。昭和戦後期になると由来伝承の記載内容に次々と変化が起こり、豊作や豊漁祈願に結びつけられたような話が中心に語られるようになり田耕・神玉両方の祭として指定時の意見書に記事の重きの置き方が変わっていくことが見てとれ、蒙古襲来に関する伝承や地名はほとんど書かれなくなる。

平成期に入ると山の神・厳島神社と海の神・蛭子社の陰陽和合の出合祭であると指定時の意見書の内容が中心に記載され、地域の平和や繁栄を祈願するようになる。外敵退散を祈る神事や蒙古軍の祟り鎮魂が祭の始まりとする内容は言い伝えとして扱われてほとんど書かれなくなり伝承や地名の記載もなくなるが、祭自体は古くから続くものであるということは書かれており伝統という意識が見られる。

戦後において同じ年に浜出祭の記事が 2 編以上あるのは、指定時の意見書が出された昭和 44(1969) 年と県指定無形民俗文化財に指定された昭和 51(1976) 年、及び平成 2(1990) 年である。平成 2 年には土井ヶ浜祭場の真横に土井ヶ浜ドームが完成したために浜出祭に関わる記事が掲載されたと考えられる。

5．由来伝承の画期と今後の課題

明治 32(1899) 年から平成 9(1997) 年までの新聞記事に見られる浜出祭の由来伝承には、2 つの画期が見られる。

一つ目は昭和戦後期から新たに豊漁豊作祈願祭という見解が登場する点である。豊作や豊漁祈願に結びつけられたような話を中心に、田耕・神玉両方の祭として語られるように記事が変わっていく。これは、昭和戦後期は日本の高度経済成長期にあたり時代の気風によるものという可能性が考えられる。

二つ目は昭和 51 年に浜出祭が山口県無形民俗文化財指定を受けたことを境に指定時の意見書の内容が由来の中心に書かれ始める点である。文化財指定を受けて公的な見解ができたことにより、以降は指定に重きが置かれている。浜出祭の記事も指定時の意見書の内容を汲んだ男女二神の結合による豊作祈願というのが前面に出てきている。

一方祭の当事者たちにとっては、江戸時代から続く浜出祭＝蒙古襲来という伝承が今も残っている。浜出祭の由来伝承について平成 16 年以降の祭では、祭場で蒙古襲来に関するアナウンスがされ蒙古の霊 (怨霊) の鎮魂祭ということや五穀豊穣・豊漁の祈願祭と伝えられた。人々の口承の中では蒙古伝承がいまだに強く残っており、実態としては人々の伝承の中では蒙古襲来に関わる伝承が強い。新聞で書かれる由来との差が何に起因しているのかは明らかにできず今後の課題である。

今回、地方紙の新聞資料データから浜出祭の由来伝承に注目してまとめ変遷過程は大きく捉えられたが、同じ新聞データから浜出祭の開催年月日や座や行列の構成などの時代的変遷については考察の余地がある。浜出祭が行われる豊北地域では超高齢化・人口減少が進んでおり[15)]由来伝承の聞き取り調査は難しくなるばかりであり、後世の者が祭を知る手段として早急に行う必要がある。

(謝辞)

最後に本稿作成にあたり、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアムの吉留徹副館長及び大藪由美子氏、高椋浩史氏に多くのご配慮とご教授を賜り、資料収集および整理を同ミュージアム資料収蔵室の岡部寛子氏に、資料収集を同ミュージアム資料収蔵室の矢都村典子氏と佐坂貴之氏にご協力いただきました。記して感謝申し上げます。

引用文献・参考文献

近藤清石編 (1973)「巻第二百　長門国之二之二十六　豊浦郡　村誌之二十五」『山口縣風土誌 (十)』(三坂圭治監修) 歴史図書社

渋谷正勝編 (1953)『山口県災異誌』山口県

下関市豊北歴史民俗資料館・土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム (2011)『浜出祭調査報告書－Ⅰ (資料編)　浜出祭の現在 (平成 16 年祭りの実際)』

土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム (2014)『土井ヶ浜遺跡　第 1 次～第 12 次発掘調査報告書』、第 1 分冊「本文編」

豊北町教育委員会 (1983)『浜出祭伝承活動記録作成　浜出祭』

豊北町史編纂委員会 (1972)『豊北町史』豊北町

豊北町史編纂委員会 (1994)『豊北町史　二』豊北町

豊北町史編纂室 (1970)『浜出祭の記録　山口県選択 (記録等の措置を講ずる無形の民俗資料)』豊北町教育委員会

15) 下関市の住民基本台帳に基づく市総務課集計数平成 31(2019) 年 2 月 28 日現在 (下関市 HP) で計算した超高齢化率は 52.89％ (小数点第 2 位以下四捨五入)、人口は 8,881 人。豊北町合併時、昭和 30(1955) 年の人口 28,148 人 (下関市 HP)。

豊北民話集編集委員会 (2004)『ふるさと豊北の伝説と昔話』、第二集　浜出祭特集、豊北町歴史民俗資料館友の会

山口県地方史学会編 (1979)「豊浦郡中神田村由来書」『防長地下上申』第三巻、マツノ書店

山口県文書館編 (1963)「神田上村　十一」『防長風土注進案』第十八巻　先大津宰判、山口県立山口図書館 (復刻版 (1983) マツノ書店発行)

山口県文書館編 (1984)「神田上村十二両社外末社」「豊浦郡田耕村寺社由来」「一宮八幡宮外諸社　西慶寺　法船寺　光沢寺」『防長寺社由来』第五巻

山口県文書館編 (1986)「豊浦郡田耕村寺社由来」『防長寺社由来』第七巻

吉留徹 (2010)「浜出祭覚書－浜出祭由来伝承の形成と展開－」『研究紀要』、第 5 号、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

吉留徹 (2016)「メディアのなかの「数方庭祭」－明治・大正期の新聞資料から－」『研究紀要』、第 11 号、土井ヶ浜遺跡・人類学ミュージアム

吉村清亨 (作成年度不詳)「故中山忠光卿御薨去事實調書」(表紙に「明治 39(1906) 年 11 月記」とあり)

下関市 HP　高齢者人口 (平成 31 年 1 月 1 日～ 2 月 28 日)
http://www.city.shimonoseki.lg.jp/www/contents/1114166266453/index.html

下関市 HP　人口及び世帯数 (国勢調査・推計人口)
http://www.city.shimonoseki.lg.jp/www/contents/1425977780051/index.html

表１　浜出祭新聞記事一覧

	事例	年月日	新聞名	記事タイトル	備考	ページ
1	①	明治32年4月27日	防長新聞	土井ヶ濱に於ける濱殿祭		2面
2	②	明治32年4月27日	防長新聞	濱殿祭拝観の記(一)		不明
3		明治32年4月28日	防長新聞	濱殿祭拝観の記(二)		不明
4		大正2年4月16日	馬関毎日新聞	北浦濱殿大祭		7面
5	③	大正9年4月2日	関門日日新聞	田耕辨天の 濱殿祭(上) 十日より執行さる 古典式の御祭		2面
6		大正9年4月3日	関門日日新聞	田耕辨天の 濱殿祭(下) 十日より執行さる 古典式の御祭		3面
7		大正9年4月17日	関門日日新聞	八年振に執行されし 田耕の濱出祭 沿道各村の人出六萬人 古式に則る荘嚴の祭典	日付は同紙面他記事からの推測	2面
8		大正9年4月22日	関門日日新聞	田耕辨天御神幸	写真のみ	2面
9		昭和2年4月10日	関門日日新聞	瀧部市守神社祭		5面
10	④	昭和2年4月11日	関門日日新聞	鎌倉時代の 風を裝ふ大行列 田耕村の嚴島神社の殿祭 七百年の歴史と由來		5面
11		昭和2年4月14日	関門日日新聞	濱殿祭の餘興に大競馬		2面
12		昭和2年4月16日	関門日日新聞	七年目の 濱殿祭 供奉者二百餘 近年大賑ひ		7面
13		昭和2年4月17日	関門日日新聞	鎌倉時代を 偲ぶ 濱殿祭執行	写真2枚あり	2面
14		昭和2年4月18日	関門日日新聞	母を戸に乗せ曳いて祭見物 涙ぐませた孝行夫婦 田耕村の嚴島神社へ		2面
15		昭和2年4月18日	関門日日新聞	祭見物の幼女轢殺さる		2面
16	⑤	昭和2年4月18日	馬関毎日新聞	鎌倉時代 其儘の行列 七年に一度行ふ 田耕の濱殿祭		3面
17	⑥	昭和9年4月9日	関門日日新聞	弘安の役の鎮魂・濱殿祭 古代行列繪卷 田耕・神玉兩村最大最古の行事 八年振の大祭十五日執行		2面
18		昭和9年4月13日	関門日日新聞	濱殿祭迫り 素晴らしい人氣		2面
19	⑦	昭和9年4月14日	関門日日新聞	遠き弘安の國難 戰勝記念大祭 明十五日愈よ執行される 田耕神玉　濱殿祭の由來	写真2枚あり	7面
20		昭和9年4月16日	関門日日新聞	七百年の昔を今に 壯嚴な濱殿祭 沿道を埋む數萬の奉拝者群 土井ヶ濱邊の盛典		7面
21		昭和9年4月17日	関門日日新聞	古典ゆかしき濱殿祭畫報	写真あり	2面
22	⑧	昭和16年4月8日	関門日日新聞	豪華の幕開く 元寇濤當時の戰捷譜 田耕村嚴島神社濱殿祭		2面(推測)
23	⑨	昭和30年4月5日	防長新聞	七百年の傳統ほこる 豊北町の浜いで祭り 七年に一度の大祭事	写真2枚あり	5面

	事例	年月日	新聞名	記事タイトル	備考	ページ
24		昭和30年4月19日	防長新聞	田耕街道練る 古式ゆかしい濱いで祭	写真あり	5面(推測)
25	⑩	昭和37年4月16日	防長新聞	20㌔にわたって武者行列 豊北町「浜殿祭」に人出六万	写真あり	5面
26	⑪	昭和44年4月9日	防長新聞	十五日にぎやかに 豊北町　七年に一度の”濱殿祭”		不明
27		昭和44年4月13日	防長新聞	15日豊北町の浜殿祭		5面
28	⑫	昭和44年4月16日	防長新聞	七年に一度 雨をつき浜殿祭 延々三十㌔に行列絵巻　豊北	写真あり	5面
29	⑬	昭和51年4月11日	山口新聞	奇祭・浜殿祭 男女二神が”デート”		不明
30	⑭	昭和51年4月12日	防長新聞	満開　春まつり にぎやかに浜出祭 豊北7年に一度の民俗行事	写真あり	7面
31		昭和58年4月11日	山口新聞	濱殿祭 古沢　政士(豊北町神玉・歌人)	詩、写真あり	4面
32	⑮	平成2年3月25日	山口新聞	7年に一度　浜出祭 地元民、15㌔の武者行列 豊北町で来月15日		11面
33	⑯	平成2年4月16日	山口新聞	700年の伝統　厳かに　豊北町浜出祭 6時間かけ武者行列 ぶり切り神事など古式も 沿道に8500人	写真2枚あり	7面
34		平成9年3月7日	山口新聞	<東流西流> 浜出祭① 西島　廣海(豊北町、田耕神社神職)	コラム	17面
35		平成9年3月14日	山口新聞	<東流西流> 浜出祭② 西島　廣海(豊北町、田耕神社神職)	コラム	17面
36		平成9年3月21日	山口新聞	<東流西流> 浜出祭・山側民話から 西島　廣海(豊北町、田耕神社神職)	コラム	不明
37		平成9年3月28日	山口新聞	<東流西流> 浜出祭海側民話から 西島　廣海(豊北町、神社神職)	コラム	17面
38		平成9年3月30日	山口新聞	豊北　県文化財 来月6日「浜出祭」 下関でブリ切ＰＲ	写真あり	18面
39		平成9年4月4日	山口新聞	<東流西流> 浜出祭⑤ 西島　廣海(豊北町、田耕神社神職)	コラム	17面
40	⑰	平成9年4月7日	山口新聞	きらびやかに時代絵巻 豊北7年ぶり「浜出祭」	写真あり	18面
41		平成9年4月11日	山口新聞	<東流西流> 浜出祭⑥ 西島　廣海(豊北町、田耕神社神職)	コラム	17面
42		平成9年4月18日	山口新聞	<東流西流> 浜出祭 西島　廣海(豊北町、田耕神社神職)	コラム	17面